

時代と正面から向き合う言葉を探して

責任編集者・平川克美

一九七〇年代だから、もう半世紀も昔のことになるが、詩を夢中で読み、写経のようにノートに書き写していたことがあった。当時、渋谷の宮益坂上がったところにあった中村屋という古書店には、詩集のコーナーがあつて様々な判型の詩集が並んでいた。

大学を卒業したものの、何処にも行くあてのない二十代のわたしは、しばしばその場所へ通い、何冊かの詩集に目星をつけた。詩集は結構な値段が付いていて、金がたまったら買おうと思っていたのである。

目星をつけていた詩集が手に入ったときは、夢中で読み、気に入った詩はノートに書き写して暗唱した。

あれは熱病のようなものだったのかもしれない。時の経過とともに、薄皮が剝がれるように、熱狂は薄らいでいった。わたしは会社を作り、毎朝決まった時間

に起き、営業に走り回り、帳簿とにらめっこをするという日々を続けることになった。

今にして思えば、それは逆だったのかもしれない。

詩を読む日々が健康であつて、事業を回しているときが熱病のようなものだったということである。言葉に対する健康な感受性とでもいうべきものは、金勘定の世界にのめり込むことで鈍化し、それが熱病のようにわたしの内部に蓄積していたとも言えるからである。いや、蓄積したというのはちよつと違う。小さな空白が徐々に膨らんでいく感じと言った方が正確だ。

忙しさに追い立てられるような日々を三十年近く続けられたのは、その生活がそれなりに充実しており、闘争のようなビジネスの世界の中に待ち受けている冒険が楽しかったからだろう。それでもわたしの内部に膨らんでいた風船のような闇の膨らみが、もう限界近くには達していると感じる時があつた。

あるとき、本棚の奥から一冊の詩集を取り出して読み始めた。表紙には『水の上衣』と書かれていた。その中に取められていた『短い鉄の橋を渡って』という詩を読んだ時の衝撃は今もわたしの身体の奥に残っている。買った時にも、読んでいたし、ノートにも書き

写していた作品だったが、三十年のビジネスマン生活を経て再会した言葉は、まるで生まれたての赤子のように新鮮に輝いて見えたのである。

そこにはこんなことが記されていた。「光を集める生活は／それだけ深い闇をつくり出すだろう」

それは、自分の内部に風船のような闇を抱え込んだ自分にぴったりの言葉だった。

同時に、奇妙なことをわたしは考えるようになった。深い闇を集めてみよう。そうすれば、それだけ明るい光を作り出せるのかもしれない。

わたしは、自分が起業し、三十年間育ててきた会社を辞めた。それからまた、詩のある生活が始まった。

この度、本誌で「詩の特集」を組むので編集の責任者をやってくれないかとのご依頼があつた。いや、正確には自分が連載を続けているこの雑誌で、一度は詩の特集をやってみたらどうかと打診していたのはわたしの方である。フェイクニュースの時代と呼ばれ、言葉がないがしろにされている政治状況の中で、本物の言葉との衝撃の出会いを読者と共有してみたいという気持ちがあつたからである。

自分と時代は不可分のもの。自分に向き合うように、

正面から時代に向き合う言葉があるはずだ。

話が進んで、わたしは編集をお引き受けすることになったのだが、ただの詩の愛好家であり、専門家でもないわたし一人では不安もあつた。わたしは、最も信頼している詩人のお一人である小池昌代さんにアドバイザーをしてくれないかと頼み込んだ。小池さんとの冒頭の対談は、こうして実現した。

わたしたちは、今のこの時代に自分たちが読んでみたい詩人たちの名前を挙げていった。他にも幾人も、いま読んでみたい詩人たちがいるが、泣く泣く今回の人選となったと言うのが正直なところだ。呼びかけに応じてくれた詩人たちに心より感謝申し上げたい。個人的には、この対談で触れた清水哲男さんからご快諾をいただいたことに深い感銘を受けた。

集まり始めた書き下ろしの作品を読んで、鳥肌が立った。同じ物書きとして、言葉と真正面に向き合おうとする詩人たちの覚悟に圧倒されたのである。

今回の特集の表題は、「詩のある生活」というものだ。わたしが、詩のない生活から、詩のある生活に戻ってきたように、多くの読者にも詩を読む喜びを味わっていただければ幸いである。